

非暴力平和隊・日本 (NPJ) ニュースレター

第25号 2008年10月28日発行

〒113-0001 東京都文京区白山1-31-9 小林ビル3階

Tel: 080-5520-3077 E-mail: npj@peace.biglobe.ne.jp

Fax: 03-5684-5870 Website: <http://www5f.biglobe.ne.jp/~npj/>

Nonviolent Peaceforce Japan Newsletter

・『スリランカ平和構築』—ジハン・ペレーラ氏講演と懇談—	理事	大橋祐治	2
・恋しい日本の紅葉	スリランカ便り	スリランカ FTM	徳留由美 5
・紛争地における NGO の役割と可能性	理事	前田恵子	10
—9月28日イベント報告—			
・パレスチナ便り	会員	中原隆伸	12
—MEND でのここまでを振り返って—			
・国際理事報告	理事・NP 国際理事	阿木幸男	16
・9月理事会報告・他	共同代表	大畑豊	17
・会計報告		大橋祐治	18



フィリピンの NP の ICP (フィールド・チーム・メンバー)



ジハン・ペレーラ氏の講演と懇談を通して知るスリランカ

- ・ 特別シンポジウム：
「スリランカ平和構築」

—市民社会のチャレンジと
国際社会の支援（10月9日）—

一橋大学 平和と和解の研究センター主催

- スリランカ国民平和評議会のジハン・ペレーラ氏が第一回自由都市・堺平和貢献賞受賞のため来日された機会に一橋大学で開催された特別シンポジウムに参加した。以下は、ペレーラ氏の講演、パネリストとの討議、参加者有志との懇談を通じて特に印象に残った点を中心に報告します。
- 結論として（1）国際 NGO は、とに

かくスリランカに留まって居て欲しい。留まることによってのみ、政府の行動を監視し国際世論に発信できる（2）LTTE 制圧後の LTTE 支配地域を含めてスリランカの政治・行政は難しい（アメリカのイラク戦争と同じ）、一筋縄ではいかない困難を伴う問題、したがって辛抱がいる。

■ ジハン・ペレーラ氏について：

平和活動家。スリランカの NGO スリランカ国民評議会（National Peace Council…NPC）専務理事（1958年生）。

NPC は、民族間の理解を促し、民衆の平和に対する意識を高めようと、1995年、ペレーラ氏ら様々な市民運動家が結集して立ち上げられた。すべての紛争当事者が非暴力的紛争解決手段によって民族が統合された持続可能な平和構築を進める目標で、人種、宗教、政党などに偏らず、小規模な市民活動を全国各地で支援しながら、平和を求める民衆のネットワークを広げた。一方で、海外メディアへの声明の発信、国内メディアを対象とした集会の企画、内戦の被害の調査などの活動を展開。専従のスタッフは 35 名。NP のスリランカ・プロジェクトは PAFFREL（自由で公正な選挙のための連合…NGO）の招聘により活動開始したが、ペレーラ氏は PAFFREL にも深く関わっている。

..... 1. 内戦の現状と見通し

- 政府軍は LTTE 本部のあるキリノッチを包囲しており何時でも掌握できる状況にある。LTTE 本部機能はすでにジャングルに移動している。LTTE が保有している軍事力、特に飛行機の所在が確認されていない。問題は LTTE が支配していた広大な地域を戦闘で勝利したあと、

どう維持していくか、兵站が伸び切ってしまう点と線では維持できない。LTTEはジャングルから攻撃を仕掛け、或いは都市部や政府支配地域で自爆攻撃をかけてくるだろう。

- スウェーデンのある大学の調査によると、戦場の数ではスリランカはイラク、アフガニスタンに次いで3番目に多い大きな紛争なのに世界的にはあまり注目されていない。9月だけで政府軍200名の兵士が死亡、LTTEは700名が死亡、過去2年半では11,000人が死亡した。

2. 国民の意識、シンハラ・ナショナリズム

- 9・11以降テロとの戦いが正当化され、スリランカ紛争もテロとの戦いと位置づけられ軍事的解決のみとの理解がもっとも一般的となっている。本当は民族問題なのだ。民族問題であるとの認識が必要である。(シンハラ75%、タミル18%、ムスリム8%、インド系タミル)しかし、これを言うと、テロリストを支援している、と言われる。民主主義でいえば、すべてのことが75%のシンハラ人の考えで決定されるが、ここに問題がある。思いやり、相手(少数派)の意見、意向を受け入れることが大切。

- しかしこれができないのはスリランカのシンハラ人は「マイノリティ・コンプレックスを持ったマジョリティ」。つまり、対岸のインドには8千万人のタミル人がいるし、マレーシアなどにもタミル人がいる。全体で見ればシンハラ人は1500万人でマイノリティ、彼らはタミル人がスリランカ以外のタミル人と結びついて力をつけることを心配しているからだ。過去に歴史がある。

- 75%のシンハラ人のマジョリティが戦争を支持している。その理由は①政府によるメディア・コントロールのため国民が真実を知らされていない(過去2年間でジャーナリストが15人殺害された

が、犯人は誰も逮捕されていない)。②政府による愛国心、シンハラ・ナショナリズムの扇動③過去数度の停戦合意、平和会議の失敗により交渉による解決を信用していない(LTTEの東京平和会議不参加、国際情勢の変化、ヨーロッパのLTTEテロ指定など)、一方が負けないと交渉できないという理由が正当化、などである。しかし、9・11以降の米国と同じでシンハラ・ナショナリズムがあって戦争に反対できる雰囲気がない背景がある。戦争を支持しない人々も同じような雰囲気、停戦には賛成するが戦争には反対できない。

3. 政府軍がLTTEを制圧した後の問題

- 政府のタミル人政策が難しい。
- LTTEがどうなるか? 最高指導者ブラバカランが死亡したらLTTEは自然に崩壊する可能性はある。或いはまた新たな指導者により復活してくるか。
- シンハラ・ナショナリズムのために、タミル人はシンハラ政府に頼れない(蓋然性が少ない)。LTTEしか選択肢がない、海外からのLTTEへの資金支援は続く可能性。(少年兵や移動の制限などの理由によりLTTEを嫌うタミル人も多いが、スリランカ政府はスリランカはシンハラのものといい、爆撃もしてくる。一方これまでの25年間のタミル側の犠牲を考えるとスリランカ政府よりはLTTEへの支持となる。戦闘自体が国際的なタミル社会からのLTTE支援を作り出し、公正な解決をするまで続く)
- LTTEにつながりがあると思われるタミル人の拘束は予想されるが、政府がそれ以上に一般のタミル人に対し厳しい対策をとることは考えられない(18%の人口構成)。
- 政府のカルナ派への対応も難しい。現在、政府は対LTTE作戦でカルナ派を利用している。その延長線上で東部州(ト

リンコマリー、バティカロア、アンバラ)では選挙によりカルナ派の政党党首が州知事となった。しかし、カルナ派は元LTTEの分派であって一般のタミル人の支持を得ていない。

4. 国際NGOに期待すること

- 現在は暗闇である。しかし必ず夜明けはある。暗闇にろうそくの灯をともし続けなければならない。灯火の灯を消してはならない。ろうそくの灯でも人々に希望と安心を与える。
- 国際NGOは留まっていることが重要である。留まっていれば当事者との対話が可能であり、スリランカや自国(日本)政府に質問できるし、報告することもできる。Monitor, Observeの役割。いなくなれば政府のやりたい放題になる。リハビリテーション、再定住、平和教育、人権擁護、どんなプロジェクトでもよい。
- トリンコマリーの中央政府代表 GA (Government Agent…行政府の最高責任者)がNPはトリンコマリーでの活動の必要はないと言っているようだが、トリンコマリーのGAは退役将軍である。政府はGAを軍人に替える動きがあるが、(他のNP事務所に言っていないのは)トリンコマリーのGAだけの考えであるからだと思う。確かに、GAから正式に撤退命令を受ける前に自発的に行動したほうが良いかもしれない。
- スリランカ政府は国際NGOを信頼していない。国際NGOは、その設備等をLTTEに使わせ支援していると思っている。北部から出て行けというのは、北部での安全が保障できないということと、自由な軍事行動がとれないこと。スリランカ政府も国際NGOは殺さない。NPは特に経済的貢献もしていないので、政府にとっては邪魔なだけ。しかし国際NGOは出ていけても地元住民はどうなる。戦闘地域から住民が移動しようとしてもLTTEが許さない。市民

を「人の盾」として利用するため。

5. 市民社会にできること

① 戦争に反対し続けること

スリランカの紛争は、米国とイラク、アフガニスタンのように国と国との紛争ではなく、小さな島での紛争。共存しかありえない。

② マイノリティの権利保護

国際条約や憲法にもある権利を主張していくこと。政治家が関心があるのはマジョリティであり、マイノリティでない。マイノリティの保護の訴えは市民にしかできない。

③ 平和教育の継続

将来、政治的解決について議論されるときに市民の支持、理解を得るために必要。政治的解決や権力の共有(連邦制)、またカナダ、北アイルランドなどの民族間での経験などを学ぶことが重要。

これらをしていくことは容易ではないが、軍事的解決は間違いであることを訴えていかないといけない。戦争に反対すると、裏切り者呼ばわりされ、死がふさわしい、となる。国際NGOは、退去命令が出たら反対して欲しいが、ビザのこともあるので、限界はある。

国際NGOにはいつづけて、各派との対話を継続してほしい。過去50年いた欧米NGOも去り始めている。スリランカのようないわゆる「中流国」からアフリカなどへシフトしていることもある。

6. 最後に

少し前に妻と子供の学校の集会に行った。始まる前に子供たちが祈っている。北部の、東部の子供たちのために。先生の指導であろうが、ここでも自分一人ではない、多くの人たちが支えてくれていることを体験し、励まされた。スリランカの文化、思いやり、慈悲、分かち合いの精神・文化は残っていると信じているので

平和の活動をこれからも続けていきたい。

.....

講演に先立ち、ジハン・ペレーラ氏に非暴力平和隊・日本の一員として、今回の受賞にお祝いを申し上げたことを付記します。

注記：

・自由都市・堺 平和貢献賞：

中世に自治都市として栄え、千利休らが輩出した堺市が 2007 年度に創設した。「都市の発展には平和が欠かせない」との発想で、国内外で平和活動に取り組む個人・団体を顕彰する。第 1 回の受賞者としてジハン・ペレーラ氏他 2 団体が表彰された。

・一橋大学 平和と和解の研究センター：

平和と和解、そして戦争、紛争、対立、暴力、記憶、表象等の諸問題をどのように思索し、現在と未来の平和の構築に向けて、人々や社会にどのような貢献ができるか、という今日最も必要とされる問いへの答えを追求し、思索を深め、そして実践することを目的として、2007 年 4 月に一橋大学大学院社会科学部研究科に設置された。浅見靖仁理事は研究メンバーの一人である。

恋しい日本の紅葉

—スリランカ報告—
徳留由実

<2008/9/15>

不安定な日々

スリランカは、暑い日々が続いています。

私はベルギーに 2 週間程滞在していました。友人の結婚式に出席すると、休暇をかねての滞在でした。気分転換もで

きたので、良かったと思います。ベルギーに発つ前の 1 週間は急性胃腸炎で病院に入院していたので、ベルギーでは良い静養にもなりました。

8 月末にスリランカへ戻り、コロンボでコロンボ対応チーム (CRT : NP の地方拠点の要請に応じてコロンボ政府当局、その他の関係機関に働きかける活動) の仕事を手伝っていました。先週は火曜日から金曜日にかけて、全てのフィールド・スタッフが集まり「Strategic workshop」が開かれました。メル・ダンカンにも初めて会いました。また Project Director のティム・ウォリスも参加しました。会議は前年度よりは小規模だったようですが、それぞれのフィールドが仕事上に難しい問題を抱えているので、時間的には余裕がなかったように感じます。

私は日本大使館で開かれた四半期の NGO 会議にも出席しました。その際、アフガンでの日本人 NGO 職員が殺された事件も取り上げられました。再度大使館は邦人リストを日本政府へと提出したそうです。また会議ではビザなどの問題にも触れました。NP だけではなく、他の多くの団体もビザの問題を抱えています。

バブニア地方からの国際団体の撤退も始まっています。トリンコマリー自体も約 3 週間前に海軍基地が奇襲を受けています。報道によれば犠牲者の数は多くはありませんが、実際はたくさんの兵士が犠牲になったようです。軍医だけでは足りずに、一般の病院のスタッフも緊急召集されたようです。

ジャフナ・チームも、情勢悪化にそなえた緊急の撤収対策を話し合っているようです。

トリンコマリー・オフィスも、岐路を迎えています。政府からの圧力や、他の

要因も関係し、GA（中央政府の地域代表）から直接、退去命令が出る前に、撤収するべきではないかと話し合っています。自発的に撤収した後であれば、他の場所からトリンコマリーへと入る事も可能ですが、強制退去させられたとなれば、トリンコマリーへ戻る事もできなくなるでしょう。また、1つのエリアからNPが追い出される事は、他のオフィスにも悪影響を及ぼす恐れがあります。

退去するとなれば、ナショナル・スタッフの事もありますが、1ヶ月ほどは時間がかかると思います。FTM（フィールド・チーム・メンバー）は他のオフィスへと転属になるでしょうが、ナショナル・スタッフに関しては、明確な事が提示されていません。そのため、ナショナル・スタッフは身の心配を隠しきれません。

Country Director のフィオナが10月末をもって離任する事になりました。ウガンダへ戻る必要あるとのこと。これは先週の月曜日に発表されましたが、コロomboのスタッフも突然の決断に驚いているようでした。今から新しい人材を探す事になると思いますが、この不安定な状況は、改善されて欲しいと願うばかりです。

彼女は能力的にも長けていたので、とても残念に思います。早く後任が決まり、皆が落ち着いて問題に取り組んでいけるようになって欲しいです。

CRTにいる間も、多くの同行をしました。今は刑務所から出てくる人の数も増えています。刑務所から出たらすぐ外国へ逃れたいという人達が、後を絶ちません。また、トリンコマリーでも、ACF（フランスのNGO：飢餓対策支援）の撤収後に虐殺されたACFの現地人スタッフの家族がコロomboのCID「Criminal

Investigation Department」から調査の為に呼ばれています。これにもどのように対処していくべきかが問題です。

戦局の変化により、スリランカ政府はメディアの規制や証人達への圧力を強めているようです。

<2008/9/18>

現地スタッフの不安

本当はこまめに現地状況のご報告をした方が良いでしょうが、とにかくスリランカの情勢だけでなく、NP SL内でも常に人事の変化などが起こっており、状況報告がしにくかったりしました。

現地スタッフも、トリンコマリー・オフィスが閉鎖されると感じているので、生活の心配をしています。早く結論が出され、的確なサポートを現地スタッフに対してして欲しいです。

<2008/9/29>

活動制限

日本の台風は大丈夫でしょうか？スリランカの北部は台風にはたくさんの人達が巻き込まれ、苦しんでいます。日々のニュースに心が痛みます。

GAがNGOの活動を抑えにかかっている状況下、トリンコマリー・オフィスは活動を制限しています。新たな戦略的な計画を必要としています。

トリンコマリー内のpeace committee(PC)へ対する活動にも制約が生まれてきています。またPC自体も、<非暴力トレーニング>等よりも、経済的・開発的な援助を求めている部分もあり、これから先PCと共にどのように活動していくかも今後の課題です。

PCは基本的に警察の下で作られた部分もあり、警察からある意味の「認知と理解」を得ることも、ワークショップを開く上で重要になってきます。また警察の

トップと連絡をとるにしても、GAの承諾が無ければ、難しくなります。トリンコマリー内での活動は難しい局面を迎えています。

この先6ヶ月程度の間にも、スリランカの情勢は変化するでしょうし、もしかしたら6ヶ月を待たないで、事務所を閉鎖しなければならないかもしれません。先行き不透明な状態は現地スタッフにとって、不安定な状況を生み出しています。現地スタッフの中には、すでに新たな職を探すべきかどうかと悩んでいる人もいます。

トリンコマリー市内においても、日々の犠牲者が出ています。犯人を特定できない状況です。トリンコマリーは他の地域に比べて落ち着いているように見えますが、何が引き金になってもおかしくないと 생각합니다。タミル人だけでなく、今朝はシンハラ人も不特定の人物に殺されました。さまざまなコミュニティーが共存している場所ですし、経済的に皆が苦しく、日々のフラストレーションを抱えている人々ばかりですから。

今週はチーム・ミーティングが主になってくると思います。これから先のプランを話し合わなければなりません。

また、ムートルのフィールド・オフィサーの Jaleel がフィリピンのアティブから指名され、3ヶ月間の短期のサポートでミンダナオに行くことになりました。

現実的に、ムートルでも大きな活動をする事ができないので、Jaleel がフィリンへ行く事になりました。

日本の秋の紅葉が懐かしい日々です。やはり四季がある国とはいいものですね。新しい総理大臣も選ばれ、問題ばかりの日本ですが、美しい四季の文化と心の文化だけは失われて欲しくないなど、秋の

紅葉を想像しながら、感傷にふける今日です。

<2008/10/7>

トリンコマリー・オフィスは不要と GA

昨日今日と、リタと人事のスミンダ(2008年7月から雇われ、前任者イクバルの仕事を引き継いでいる)がトリンコマリーにやってきました。2日間かけての討議で、どうにかオフィスの今後に向けての計画性が見えてきました。ここまでくるのに、数ヶ月を要しています。

2008年5月中旬にトリンコマリーのGAからファックスで、「トリンコマリー内でのNPの活動は、必要性がない。将来的にNPの存在が重要とはいえない」というような内容の手紙がコロombo・オフィスに届いたのです。それ以来、トリンコマリーでの活動には制限が生まれていました。

トリンコマリーから追い出される前に退去した方が、将来トリンコマリーに戻る可能性も残せるし、他の地域オフィスにとってもよいのではないかと(1つの場所から追い出されるという事態は、マイナスの波紋を呼ぶ危険性があるので)との判断で、将来に向けての準備が7月から始まりました。

今回は、人事のマネージメントも来たので、現地スタッフが個人的不安や問題などについて話す機会が持てました。もちろん、全てが一気に解決するわけではありませんが、少しでも心配の要因を減らすことができるようにと願います。

また、来週にはアンジェラも休暇から戻ってきますし、ティム・ウォリスもスリランカ入りをします。この2日間で、これまでの総括的なものをまとめて、計画を立てました。

まずは、この計画を受け入れてもらえることを願うばかりです。そうでなければ、即刻トリンコマリーから出なければなりません。そのような事態が生まれないことを願います。

わたし自身も、違うオフィスを行ったりきたりする状況には、少々疲れています。7月に休暇から戻った時にはコロンボに配属され、またトリンコマリーに戻ったりと、不安定な状況でした。

カントリー・ディレクターのフィオナも今月の25日には仕事を終えます。新しいリーダーが早く決まり、安定感がプロジェクトにも生まれることを願います。

毎日のように、戦闘や自爆テロのニュースが入ってきます。トリンコマリー市内はバティカロなどに比べて平静を保っていますが、いつ何が起こるか分からないのが実情です。市内の兵士の数も、夜には昼よりも少し増員されています。また通常のパトロールしている兵士の数も少し増えたように感じます。

避難民の人達が、自分達の土地へと戻ってきていますが、このような resettlement area における問題もイロイロと浮上しています。イザコザが起こらないことを願うばかりです。

<2008/10/15>

やりきれない思い

トリンコマリーの情勢は落ち着いているように見えますが、路上での誘拐や、殺人は増えてきています。この間は、シンハラ人のビジネスマンも殺されました。様々な事件の噂もあります。つい昨日まで普通に生活していた人達が、突然犠牲者へと転落してしまう。なんとも辛い思いです。

ムートルの ACF 殺戮の犠牲者の家族達

のなかにも、心理的に追い込まれている人達があります。9月の中旬ぐらいに、5人の家族が事件の証人として調査を受けるようにと、コロンボの犯罪捜査班 (criminal investigate department) から呼ばれました。全ての家族が不安を抱えて、私達の事務所へと来ました。コロンボまで一緒に行こうかと提案しましたが、全ての家族が一緒にコロンボへと移動する事になりました。

1人の女性は旦那さんを、この殺戮で失いました。彼女は、お母さんとお兄さんも特定のグループに殺されていきました。彼女の心は、不安と長きにわたる緊張した生活、多くの家族を失った悲しみ、政府関係者からの事件に関しての圧力、子供を育てるための収入の確保など、さまざまな心理的圧迫を受けていました。以前に NP の事務所に来た時には、積極的に仕事を探している様子だったのですが、コロンボに呼び出されて、最後のオフィス訪問に来た時には、スタッフの前で不安と全ての感情が噴出して泣き出しました。

彼女はコロンボへ行く途中で、心の糸が切れてしまい、心臓発作を起こして車の中で亡くなりました。私達はこのニュースを次の日に知る事となりました。残された2人の幼い娘達は、彼女のお父さんが面倒を見ることになりました。このお父さんも、全ての家族を失い、可哀相だと感じます。なんともやりきれない思いに駆られました。今でも考えるだけで、心が重くなります。人間の心には限界があるのだと・・・。

トリンコマリーのオフィスの行く末も、間もなく明確になると思います。とにかく GA と話をしない事には、何も始まりません。

ジャリールもフィリピンへと行きます

た。スリランカ政府が全ての NGO の撤収を求めている情勢からして、ムートルのオフィスは、近日中に全てを撤去されるとの見方が出ています。

国内ディレクターのフィオナも、来週末には NP の仕事を終える予定です。NP プログラム・ディレクターのティム・ウォリスが、スリランカへ入りしました。この不安定な時期をサポートする為です。ジャン・パッションも、近日中にはスリランカ入りする予定です。

個人的には12月の中旬から1月中旬まで休暇を取る予定です。私も心の休憩が必要です。戻る前には新しい配属も決まっていることでしょう。できたら、コロomboの CRT に戻れたらと思います。まだ新しい契約内容なども決まっています。12月を前に契約についても、いろいろと話しをしないとイケません。

秋の紅葉の写真を取られた方がいたら、メール添付で送ってもらえませんか？

<10/27>

混迷続く

スリランカ北部の情勢は、なんとも難しい状況へとなっています。トリンコモマリー自体には大きな影響が表面上はないように見えますが、小さいながらも、深刻な問題は生まれつつあります。

「自爆犯人がトリンコモマリーへ侵入した」などの噂もありましたが、路上で殺される人数や誘拐の件数が、私が赴任した時に比べて、増えてきているように感じます。停戦破棄の前までは、比較的穏やかだったように感じています。

先週の月曜日にはバレチャナイ・オフィスの前の通りで地雷が見つかり、爆発す

る前に地雷処理班によって処理され、大事にはあたりませんでした。

政府は、「今年中に反政府勢力を一掃する」と言っています。これからどのような影響が生まれてくるのか、予測が難しい状況です。

トリンコモマリーオフィスがどうなるのかを決めるプロセスは、停滞しています。この状況は全てのスタッフにとって不安定な状況を生み出しているように感じます。5月に「NPの仕事はトリンコモマリーでは必要性がないだろう」という婉曲かつ明確なファックスがスリランカ政府当局から届いて以降、すでに数ヶ月が経っています。

先週の金曜日をもってフィオナも NP SL を去りました。今はリタがその任を埋めています。

ジャン・パッションと、彼の奥さんもスリランカ入りし、本部の手伝いをする事になっています。ティム・ウォリスも11月の初めにはスリランカから出るので、彼がトリンコモマリーへ来て、GAに会う機会はないかもしれません。

先週の土曜日には、「無事に父の一周忌を行うことができた」と母から伝えてきました。一周忌に母の手伝いができなかったのも、せめて年末のドタバタは手伝い、去年は共に年を越せなかった分、今年は家で静かに越したいなと思っています。Ω

.....

編集者注記：

■11月3日付 TIME 誌によると、スリランカ政府軍は LTTE の本部のあるキリノッチに近い戦略地点の村を44名の死者を伴う激しい戦闘で確保し、間もなく25年間に及ぶ内戦に終止符が打たれるであろうと伝えている。

■ また、10月27日の THE JAPAN TIMES には、更に詳細な状況が書かれている。中国が政府軍に武器やその他の支援をしていること、軍事的制覇と同時にタミル一般市民に救援の手を差し伸べないと悲惨な結果に終わること、10月18日にインドのシン首相がラジャパクセ大統領に戦闘地域でのタミル一般市民の保護を強く求めたことなどが報じられている。軍事的解決だけでは恒久的な平和が保てないことは明白なので、早期に政治的交渉を再開すべきとの警告を行った。これに対し、スリランカ政府は、LTTE を制圧後は、北部・東部州の自治権付与を含む選挙などの政治的解決が図られると説明。他方では LTTE の自爆攻撃に備えてコロombo在住のタミル人の登録促進を図っており、これまでのところ政府の対応は成功している、と報じている。最後にさらに強調して、戦闘によって勝ち取った成果を確実にし、恒久的なものにするためには、タミル人の支持を勝ち取らねばならない、と締めくくっている。

キリノッチの位置は「NORTH EASTERN」の文字の上部二つ目の文字のところです。トリンコマリーは右下にあります。



一紛争地におけるNGOの役割と可能性— に参加して

前田 恵子

2008年9月28日に国立オリンピックセンターにてNPJ主催の講演会&討論会が開催された。

まず日本国際ボランティアセンター（JVC）代表理事谷山博史氏がアフガニスタンでの活動を通じての講演をされた。



JVCはカンボジアでの救援活動から始まったNGOであるが人道支援や地域開発のみならずODA改革など調査研究・政策提言を活動の柱に据えている点に以前から関心があった。この点が現時点でNPJとは大きく違い、認知度の差、支援の多さとの違いにもなっていると感じている。谷山氏の講演にはアフガニスタンで平和活動をされてきた実績があつてこそその見識の深さを感じ、なかなかうかがい知ることのできない現地の情報分析等は大変勉強になった。

ペシャワール会スタッフ伊藤和也さんが亡くなるというNGOにとって大変困難な事態を迎えた時期での開催となったが、谷山氏の話からN

GOの原理（信頼関係をベースに地域住民同士の対話のプロセスを作る）と軍の原理（上からばらまき、援助の対象を敵味方に分け地域を分断する）の違いを明示してもらったことで、あらためて非暴力的方法の現実性を確認した参加者も多かったのではないかと思います。

その後、NPJでは大畑、大島、大橋、各理事からNPの概要とスリランカにおける活動の報告が行なわれた。



JVCに比べると一般認知度が低いと思われるNPJだが参加者のほとんどの方がこちらにも引き続き参加され、熱心に聴いておられたようだった。初めてNPの活動を知ったという方が感想を寄せてくれたが、特に大島理事（写真）のたおやかなお人柄とその意思の強さに感銘を受けたと言っておられた。その方の言葉を借りればNPは「紛争解決お手伝い、よろず相談」だそうだ。「学校も作らず、医療行為もせず、何もお金を落とさないNGO」活動ではあるが、現地の人々が主役でその橋渡しに徹する姿には敬服すると感想を聞いた。

青山理事からはチェチェンを例にとり、紛争地における言論の弾圧状況

の報告があった。チェチェンは人類史上最も非道な人権侵害があった地であると思うが、それもロシアにとって手放したくないエネルギー資源（パイプライン）を持つことに由来する。

インドネシアのアチェ、東ティモール、フィリピンのミンダナオ、アフリカ諸国も然りである。

およそ紛争地とされる場所では石油、天然ガス、鉱物資源等の奪い合いが繰り返されている。

ODA改革に取り組むJVCの取り組みについて冒頭で少し触れたが、何故紛争や内戦が絶えないのか？日本はそのことと本当に関係はないのか？このような側面での説明がもっと必要ではないかと常々感じている。一般的には日本は無関係のような民族紛争や宗教紛争にすり替えられてしまっているのが大きな問題だ。NPの活動の趣旨ではないがNGO活動全般の可能性を伸ばすためには取り組まざるを得ない問題だろうと思う。自分の言葉で語れるようにするのが今後の自分にとっての課題としている。

今回のジョイント開催というのは各々の活動の違い、また補完し合える部分などがわかり易い点で収穫が多かったと思う。また告知には個人で参加しているいくつかのメンバーリスト、掲示板、ミクシィなどを使ってみたが新しい参加者など反応があった。

このような催しをぜひ地方で開催してほしい、という声もあったことを報告しておく。今後の地方開催の時もできるだけ多くの出会いがあることを願っている。

.....

MEND でのここまですを振り返って

中原 隆伸、
中東非暴力・民主主義センター (MEND)

皆様、
この文章を書くにあたって振り返ってみると、過去3年のうちほぼ2年間もイスラエル／パレスチナにいたんだなと思ひ、何か不思議な感じさえします。今までメーリングリストではビルンやウナム・サレモナでの分離壁・フェンスに対する抗議活動ばかり投稿していましたが、2007年1月以降、ここでの生活のほとんどはNPのMOでもあるパレスチナのNGO、Middle East Nonviolence and Democracy(中東非暴力・民主主義センター、以下MEND)での仕事に充てられていました。本稿では、『抗議行動の行われる金曜日以外はずっと引き籠もっていた』などという誤解を生まないためにも？、今まで殆ど書かなかったMENDでの仕事ぶり、及び活動に絞って書かせて頂こうと思ひます。

+++

MEND は 1998 年に現在もダイレクターを勤めるルーシー・ヌセイベによって設立されました。彼女はオックスフォード大学在学中に現在の夫であるサリ・ヌセイベ(第一次インティファダ時の著名な活動家の一人で、現アルクッズ大学学長)と出会い、結婚した後パレスチナに移住します。その後、ビルゼイト大学で1978年から87年まで講師を務めた後、1994年から97年までパレスチナのNGO「パレスチナ・非暴力研究センター」で働いていました。現在阿木さんと同じくNPのIGCメンバーも務めています。



2008年1月「Let's Think Together」
会議 左からDr. Saeb Erekat(パレスチ
ナ側和平交渉担当)、ルーシー・ヌセイベ
(MEND Director)、Dr. Nabil Qassis
(ビルゼイト大学学長)

2008年10月20日現在、東エルサレム(ベイト・ハニーナ地区)にある事務所ではルーシーと自分の他に二人のフルタイム・スタッフ(プロジェクト・コーディネーターとメディア・広報担当)、パートタイムでの会計担当、外部のコンサルタント及び4人の外国人ボランティア／インターンが働いています。MENDはパレスチナのNGOではありますが、自分その他の外国人が常にいるエルサレム事務所では英語が共通語になっています。とはいえ、電話やゲストが来た時などは当然会話はアラビア語になるため、その環境のお陰でアラビア語でも会話の話題位は理解できるようになりました。

東エルサレムの事務所以外にも、2002年以降MENDは「積極的非暴力ネットワーク(Active Nonviolence Network: 英語での頭文字をとってANNと以下略します)と呼ばれるパレスチナ人のネットワークを構築してきました。構成員はトゥル・カレム、ヘブロン、ラマッラ、イザリヤ(ベタニー)、ナブルス、ジェニン、カルキリヤなどに住む「積極的非暴力」

に関心を持つボランティア達で、元アル
アクサ旅団（ファタハの武装グループ）
の地方コマンダーだったと聞いている人
や、Combatants for Peace（パレスチナ
の元戦闘員、及びイスラエル軍の元兵士
をメンバーとして構成される平和団体）
の発起人の一人など、様々なバックグラ
ウンドを持つ4人の地域コーディネータ
ーによって統括されています。町によ
って異なりますが、合計ではおよそ100
人ほどのボランティアがいろいろな形で
ANNに関わっています。

自画自賛かもしれませんが、自分はこの
ANNに、MENDのユニークさ（及びポテン
シャル）を感じます。パレスチナには
他にも、例えばベツレヘムのHoly Land
Trust、 Beit・サフルのPalestinian
Center for Rapprochement、ヘブロン
のLibrary on Wheels for Nonviolence and
Peaceなどの非暴力NGOや、例えばビリン
のそれに代表されるような“Popular
Committee”（住民委員会）が存在しま
すが、それらのNGOがどちらかといえ
ば一地域に特化して活動を行っている
（ように自分には思えます）一方で、
MENDはヨルダン川西岸地区中のほ
ぼ全域でのネットワークを構成しよ
うとしている点がユニークだと思います。
ここ一ヶ月の間に西岸地区内のトゥ
ル・カレム及びヘブロンで事務所を
立ち上げましたが、この二つの事務
所が西岸地区での活動の拠点となり、
北部及び南部での活動がより活発に
なることを期待しています。

+++

2008年10月現在、MENDは二つのプロ
ジェクトを実施しています。ひとつは『
「積極的非暴力」提唱のためのビデオ・

カンファレンス——ヨルダン川西岸、
東エルサレム、ガザ地区を結んで』
プロジェクトです。2007年11月か
らトヨタ財団「アジア隣人ネットワ
ーク」プログラムにより助成して頂
いています。このプロジェクトでは、
東エルサレム、ヨルダン川西岸及
びガザ地区を結んでのビデオ会議
を行うことを主な活動としています。
目標は「積極的非暴力」の概念を暴
力によらない問題解決方法として
よりいっそう認知度を高め、支持
を増やしていくこと。特に、現在
のANNを、ガザ地区内のMEND
の活動に興味を持った個人とのビ
デオ会議を通じて同地域にも拡大
することを具体的な目的のひとつと
しています。

2008年1月27日から29日にか
けて、ガザからの参加者のアクセ
スを考えてエジプトのカイロで「キ
ックオフ・ミーティング」を実施
しました。本当に、本当に残念だ
ったのは、その時期の政治状況
（ボーダーの封鎖）からガザ地区
のメンバーが参加出来なかった
ことです。他地域からの参加者
はネットワークの拡大の方法、
将来のビデオ会議の運営方法、
さらに今後のプロジェクトの実
施などについて様々な議論を行
い、具体的な提言をまとめまし
た。個人的には、忙しいメンバ
ーが多く、日頃一堂に会すること
が難しいメンバー全員の連帯
感がこの会議を通じて深まった
ことが会議の一番大きな成果
であったように感じます。

その後西岸内の各都市、及び2008
年4月にはガザ地区の参加者と
東エルサレムの参加者によるビ
デオ会議を実施しました。参加
者は「ユース層のエンパワメン
ト」に特に力を入れるとの団体
方針から、18歳から22歳を中
心にして行っています。今後も、
ネットワーク構成員の結びつき
がより綿密になることを主目的
にしてビデオ会議を実施して
いく予定です。また、ネットワ
ークの更なる拡大の対象と

して、

- ① 非暴力の概念が中東地域でより幅広く理解されることを目的とした、パレスチナ系イスラエル人や他の中東各国のユース層とのビデオ会議
- ② 中東地域の政治・経済に大きな影響を持つヨーロッパ内でこの紛争により関心を持ってもらえるよう、パレスチナ及びヨーロッパのユース間のビデオ会議

も実施していく予定です。



2007年8月、「Realizing the Dream Conference」イベント、昼食時の風景。デヘイシャキャンプのIbdaa Cultural Centerにて

もうひとつのプロジェクトは「パレスチナ社会内の暴力をテーマとしてのタウン・ホール・スタイル・ディスカッション “Town Hall Style Discussion on

Violence in Palestinian Society”」プロジェクトです。このプロジェクトでは西岸内の主要都市で積極的非暴力、人権、人間の安全保障、民主主義などの概念に関する議論の場を設けることでこれらの概念がより一層正しく理解されることを目標とします。2008年10月末にトゥル・カレムで一回目のディスカッションが予定されています。

それ以外にも、MENDは様々なイベント・会議・ワークショップ等を実施しています。

+++

自分のMENDでの仕事は主に3種類に分類されます。一つは「英語を使つての広報」です。今まで3つのニューズレター（3ヶ月に一度発行）、9つのメールマガジン（毎月発行）の編集に携わりました。ゲストの訪問のアレンジやメールでの問い合わせの返答に加えて他団体と合同でイベントなどを行う時にも主な交渉の窓口となりました。もっとも、9月より「メディア・広報担当」が同僚として働き始めているため、この分野の仕事は徐々に彼女に移項する予定になっています。

二つめは、外国人ボランティア／インターンの調整です。2007年3月にフランス系モロッコ人がインターンとして来て以来、時期的な変動はありますが合計17人のボランティア／インターンと一緒に働きました（来年1月にはもう二人来る予定になっています）。外国人としてはダントツに長い時間いるため、現在は3人のボランティアと1人のインターンに仕事を割り振ったり、その内容をチェックするといった中間管理職のようなこともやり始めています。アメリカ、カナダ（ケベック）、デンマーク、フランス、ドイツ、イタリア、日本、モロッコ、オランダ、ポーランド、スウェーデン、そしてイギ

リス出身の、個性・バックグラウンド豊かな人たちと一緒に仕事するのはそれ自体とても楽しいですし、将来とても役に立つ経験のように思えます。また、2005年に MEND の活動をサポートするために設立された MEND UK とも担当として連絡を取り合っています。

三つ目の仕事はファンドレイズです。他の二つと比べて間違いなく最も「退屈」な仕事でしょうが、その反面、団体の存続の鍵を握っている仕事でもあります。この分野の能力／経験はいろいろな団体で求められているように感じます。例えば今月に入って（ビザ延長のため）ボランティアを始めたイスラエルの NGO、Keshev では、100%ファンドレイズをやっている（やらされている？）状態になっています。NGO で働くことを希望する人の中で最初からファンドレイズを専門でやりたい、という人はまずいないでしょう。しかし、アラビア語が満足に話せない自分がパレスチナの NGO でどのように貢献できるかというのを考えた時、ファンドレイズは間違いなく自分の「英作文力」という『比較優位性（他のパレスチナ人スタッフに比べればマシな方なんです）』を生かせる方法だったと思います。

+++

パレスチナ社会で仕事をするにあたって、様々なストレス要因がありますが、一年半もパレスチナにいとほとんどのことには慣れてしまいました。それでも、常に一番大きな心配事となっているのはビザの更新に関してです。パレスチナの NGO で働いていることはイスラエル政府にとって滞在するのに十分な理由とならないため、10月5日からイスラエルの NGO、Keshev でボランティアを始めました。次のニューズレターでは Keshev の事について、特にパレスチナの NGOMIFTAH と



2007年7月 MEND サマーキャンプ
2007 ベツレヘムのプールにて。パレスチナ人参加者とドイツ、フランス、イタリアから来たボランティアと一緒に写っています。

「共同」で行っているプロジェクトについて書きたいと思います。

全部欲張って書きすぎた気がします。大変な長文になりましたが、最後まで読んで頂いた方、本当にありがとうございました。

中原 隆伸

takanakahara@mendonline.org

<http://www.mendonline.org>



【国際理事報告】

NP 国際理事 阿木幸男

1. 国際理事の辞任、交代:

諸事情で、マテオ（ヨーロッパ）とテマック（ラテンアメリカ）が辞任。オウティ（女性。ドイツ）、サンドラ（女性。ペルー）が新国際理事に就任。

■ オウティ・アラジャルビ経歴：ヘルシンキ生まれ。大学で「社会科学」を学ぶ。ベルリンにある「ハイニック・ボール財団」事務局長を務める。その後、ヨーロッパ各地での「移民問題」、「相互コミュニケーションと紛争解決」に関わる。「プロジェクト管理」、「チーム開発」、「相互コミュニケーション」セミナーのトレーナーとして活躍。移民のための「基礎教育プロジェクト」開発のアドバイザー。

2. 「紛争介入ファシリテータートレーニング」：10月11, 12日、米国フィラデルフィア市で NP 主催で週末非暴力トレーニングを実施。16名が参加。

3. ミンダナオプロジェクト:

現在、中央ミンダナオ・チームがコトバト市で活動継続。近く、スリランカ・フィールドスタッフ、ウマル・ジャリールが合流の予定。

EU、カタール政府からの補助金が入りしだい、10-12名の「平和維持活動メンバー」を補充の予定。

活動強化のため、EU、英国大使館、オランダ大使館、UNICEF に補助金を申請。

4. スリランカ・プロジェクト:

ドイツ開発局、スイス大使館、UNDP、キリスト教財団に補助金を申請。良い感触を得ているとのこと。

■カントリー・ディレクター、フィオナが家族の事情で近く、辞任、ウガンダに帰

国。リタ・ウェブがディレクター代理を務める。

■メル・ダンカン事務局長が9月に2週間、スリランカを訪問。今回は SL ディレクター、フィオナの辞任表明に伴い、代表代理、リタのバックアップ、事務局体制の確認、フィールドメンバー欠員の補充のための資金獲得、北部戦闘状態の情報収集、などが主たる目的。UNICEF 所長、米国大使などにも会った。

■SL プロジェクトは NP のメインの活動であることは国際理事会でも再確認。「財政委員会」を中心に資金獲得キャンペーンを展開中。

■プログラム・ディレクター、ティム・ワリスが現地の活動調整、強化にあっている。北部、キリノッチでの激しい戦闘で約10万人以上が避難民に。NP は困難な状況でもトリンコマリー市にとどまることを確認。バティカロアとバラチェエチナイで「国際ピースデー・セレブレーション」開催に NP は援助。現地での主たる活動は「子どもの保護」、「人権活動家」支援、ジャーナリストとの共同作業など。

5. NP 長期計画：メル・ダンカン事務局長と US 基金コーディネーター、メアリー・デロチェスは今後5年間の事業計画を検討。5年間の事業予算として、約30億円は必要であろうとの見積もりを報告。

6. スリランカ・フィールドメンバー、アンジェラ・ピンチェロ（カナダ）は9月末、カナダ、オタワ市での「53人ピース・メーカー賞」の一人に選ばれた。

7. 新国際ディレクター:

約50人の候補者から書類審査、電話インタビューで、最終候補、4人に絞られる。4人との会っての面接で、2009年1月には、国際ディレクター誕生の予定。

【9月理事会報告】

共同代表 大畑 豊

9月20日、NPJ事務所にて理事会が行なわれました。その主な内容とその後の進行経過も含めてをご報告します。

【会員拡大】

■ NPJ中期計画でも中心的課題の会員拡大に関しては、すでに開催されました9・28イベント「紛争地におけるNGOの役割と可能性」（別項報告参照）の宣伝と共に行なうとともに、今後も各地での集会・イベントを開催していき、東京都三鷹市、千葉県市川市（1月）などでそれぞれ阿木、安藤が中心に企画していくことが決められました。

その他の地域での開催も追求していますので、ご協力いただける方はよろしくお願い致します。

■ また会費の分割・自動引落としシステムの導入は今後の会員増を見極めながら検討していきます。

■ 『非武装のPKO』に続くNPJ書籍のシリーズ化は、君島が『武力なき国防』『軍隊の暴力、男性の暴力』（共に仮題）の2件につき担当者への依頼を今後行なっていく予定です。

【ウェブサイト活性化】

■ ウェブサイトの更新が滞っていくことは、NPJへの新規アクセスの多くがウェブサイトをとおしてであることを考えると早急に取り組む必要がありました。そのため、ウェブサイトの再構築に関しては、会員拡大への投資と考え、業者に依頼することにしました。現在、業者選定作業を終え、最終詰め段階です。

■ また在庫のなくなったリーフレットの改訂版も現在作成中です。

【財団基金などの獲得計画】

NPJは現在、庭野平和財団より昨年に引き続き助成金を得、トリンコマリー地区での平和構築ワークショップをNPスリランカ、トリンコマリー平和委員会と実施しています。

平和構築関係の助成を実施している財団が多くは無い中、容易ではありませんが、助成金の実績をつくっていくこともNPJ・NPへの活動への信用にもなっていきます。助成事情に詳しい会員の協力を得、今後も精力的に行なっていきます。

【8月末会計報告】

別紙、9月末会計報告をご参照ください。

■ 次回理事会は12月14日（日）開催予定です。

Ω



【その他報告事項】

■ 庭野平和財団助成金関連

庭野平和財団より「スリランカの平和と人権問題のトレーニング・ワークショップ」プロジェクトとして平成19年度前期（平成19年8月1日～平成20年8月1日）助成金600,000円をいただきました。トリンコマリーの平和委員会への支援活動です。活動報告書の締め切りは9月30日でしたが、2週間ほど遅れて10月10日に提出いたしました。

引き続き同プロジェクトのフェーズ2として600,000円の助成金を受けておりますが、情勢を見て送金する予定です。

Ω

経常収支

	項目	08年度予算	9月末実績
1	参加費	40,000	
2	会費	1,200,000	556,000
3	カンパ	700,000	307,900
5	書籍等売上		460,250
6	雑収入	170,000	16,732
7	経常収入計	2,110,000	1,340,882
8	商品仕入(書籍等)	100,000	302,400
9	発送配達費	100,000	49,000
10	給料手当	360,000	180,000
11	事務所賃貸料	300,000	150,000
12	振込料	15,000	9,990
13	会場費	70,000	7,000
14	事務費	170,000	40,126
15	旅費交通費	300,000	124,750
16	通信費	60,000	44,830
17	活動支援費	300,000	
18	講師費用	150,000	20,000
19	研修参加費	40,000	
20	雑費	40,000	17,630
21	スリランカ・カンパ	100,000	
22	リーフレット作成費		
23	経常支出計	2,105,000	945,726
24	当期経常収支過不足(7-23)	5,000	395,156
25	前期繰越剰余	1,047,607	1,136,832
26	今期経常繰越剰余金(24+25)	1,052,607	1,531,988

特別収支 と 合計

[08 年度予算] [9 月末実績]

27	田中基金		
28	庭野平和財団	1,000,000	600,000
29	大竹財団	500,000	
30	計	1,500,000	600,000
31	特別支出		
32	田中基金(スリランカ送金)		
33	(NP 国際事務局送金)		
34	(東アジア日韓会議)		
35	(スリランカ送金)		
36	庭野平和財団(送金)	-1,000,000	
37	大竹財団(国際理事経費)	-500,000	
38	計	-1,500,000	
39	特別収支(30-38)	0	600,000
40	特別収支残高	3,977,310	4,577,310
41	残高合計(26+40)	5,029,917	6,109,298
42	未払金(負債の部)		30,472
43	資産残高(41+42)	5,029,917	6,139,770

9 月実績注記：経常会計

- ① 収入は会費、カンパとも若干の未達となっています。書籍（非武装の PKO）の売上では合計では順調に推移しています。
- ② 支出は活動支援費、研修参加費など活動に関する支出が発生していない一方で（9 月末の NPJ 講演会・討論会経費は 10 月計上予定）、書籍の購入費（収入との連動）が発生。

特別収支

- ① トリンコマリー平和委員会支援のための庭野平和財団助成金 60 万円は 9 月末現在未送金。



Nonviolent Peaceforce

非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援して下さる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申し込みは、郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊・日本ウェブサイトの「入会申し込みフォーム」をご利用下さいますようお願いいたします。

◎正会員（議決権あり）

- ・ 一般個人：1万円
- ・ 学生個人：3千円
- * 団体は正会員にはなりません。

◎賛助会員（議決権なし）

- ・ 一般個人：5千円（1口）
- ・ 学生個人：2千円（1口）
- ・ 団体：1万円（1口）

郵便振替：00110 - 0 - 462182 加入者名：NPJ

* 通信欄に会員の種類を（賛助会員の場合は口数も）ご明記ください。例：賛助個人1口

銀行振込：三井住友銀行 白山支店 普通 6622651 口座名義：NPJ代表 大畑豊

* 銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話・ファックス・メールのいずれかを通じて入会希望の旨、NPJ事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

ウェブサイトからのお申し込み：<http://www5f.biglobe.ne.jp/~npj/nyukai.html>

右の本は、4月25日に発売されましたNPJの最初の出版です。
NPの活動の理念と実践、将来の目標などNPを理解する入門書・解説です。
明石書店発行、定価1,800円です。お近くの書店で購入あるいは申込できます。また、近くの図書館に購入依頼して頂ければ幸いです。

非暴力平和隊 (NP, Nonviolent Peaceforce)
とは……

地域紛争の非暴力的解決を実践するために活動している国際NGOで、非暴力平和隊・日本 (NPJ) はその日本グループです。
これまで世界中の平和活動家たちが小規模な非暴力的介入について経験を積み、功を収めて来ました。NPはこれを大規模に発展させるために2002年に創設されました。
非暴力・非武装による紛争解決が「理想主義」でも「理想主義」でもなく、いちばん「現実的」であることを実践で示していきます。

